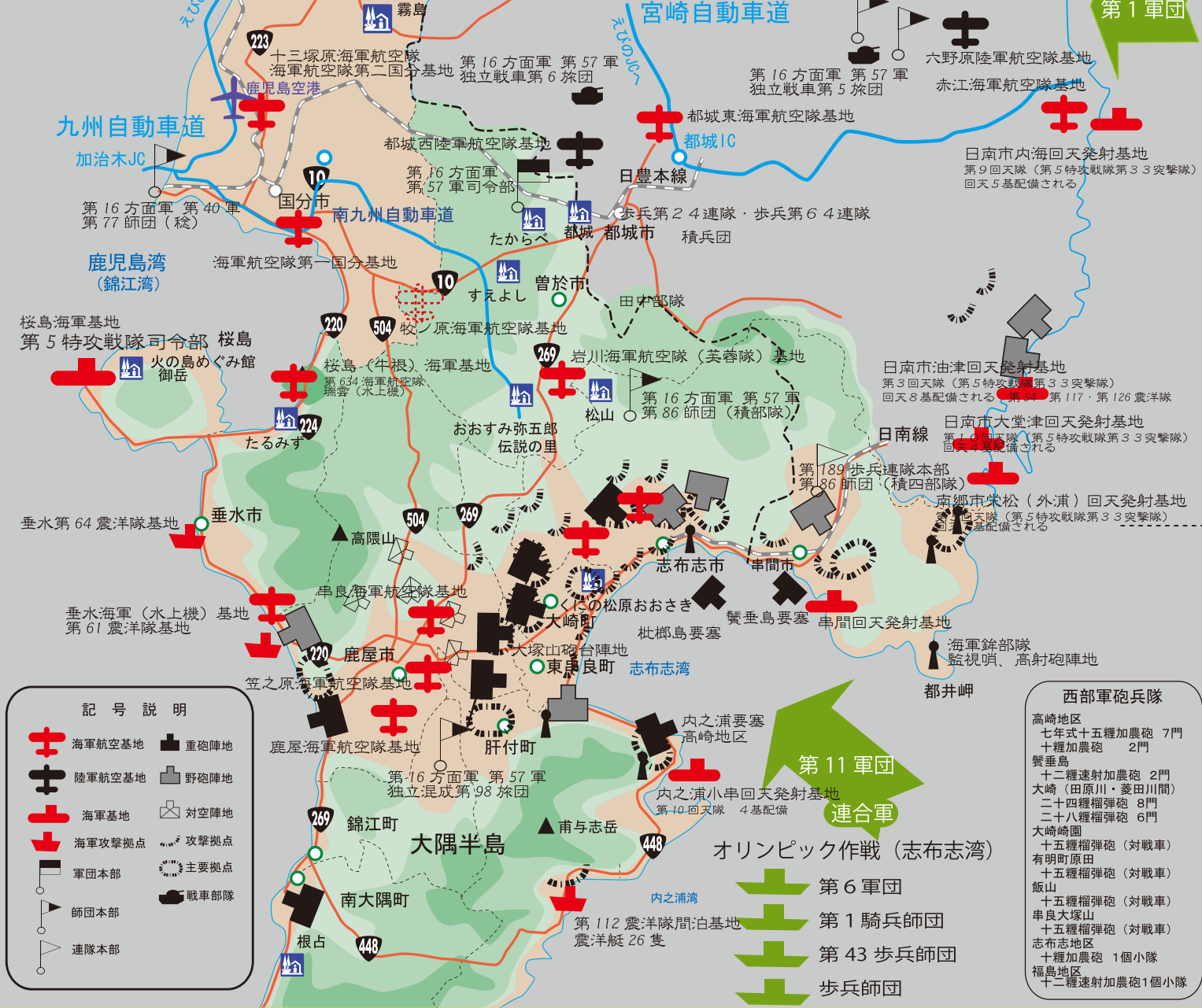


1 1945年終戦のころ、太平洋戦争の戦火は確実に志布志湾に及びつつありました。ほんの今から60数年前、沖縄も陥落し南の島に沿って攻めてくる連合軍、それを本土最南端の九州で食い止めようと構築された大隅半島の防御態勢。

まさしくその時に連合軍では「オリンピック作戦」と名付けられた、志布志湾を中心に日南海岸沿岸・吹上浜沿岸への上陸作戦が計画されていた。

日本陸軍は第86師団を中心に司令部を松山に置き、志布志湾岸上陸作戦を阻止し本土最南端の軍の重要拠点を守り、首都東京への空襲の足がかりを阻止することであった。この当時、志布志湾は有明湾と呼ばれており、有明湾に浮かぶびろう島・鬢垂島が急ごしらえの要塞にされ、海岸沿いには多くの守備拠点が構築された。



志 志布志湾岸は、日本を攻略する上での重要拠点で終戦時には大隅半島から宮崎県北部まで10カ所以上の航空基地があった。これらのほとんどは海軍航空基地で、当時はカミカゼ特別攻撃隊の重要拠点としてアメリカ軍にマークされ航空写真でその所在を把握されていた。これに対し薩摩半島の知覧・万世・青戸には陸軍航空基地が設置されており、陸軍の特別攻撃隊が発進する前線基地とされていた。当時の日本海軍と日本陸軍は戦果を競い合う形となり、終戦末期まで連携もたず作戦行動をとっていたとは言い難い状況であった。連合軍は1945年の台風シーズンが過ぎた頃から1946年3月にかけて、南九州を関東上陸の為に航空基地化するために宮崎の都農と鹿児島県の川内を結ぶ線を進出北限とし、宮崎海岸、志布志湾、吹上浜の三正面同時上陸作戦を決定する予定であった。この作戦をオリンピック作戦といい、対抗する日本軍は戦力の不足から三正面の守備が難しいことから志布志湾決戦を目論み防御陣地を構築していた。



大隅半島の歴史を訪ねてみませんか？
温故知新、おいしいものを食べながら、のんびり、ゆったり、歴史探訪の旅
こんな旅のスタイルがピッタリの志布志湾岸はさまざまなストーリーが語れます。
歴史書を片手に、カメラでも持って出かけましょう。

おおさき観光案内所 TEL 099-477-2400 FAX 099-477-2407

